

<p>芸術・スポーツ</p>	<p>【代表的な研究テーマ】</p>
<p>keyword</p>	<p>□ アートを通じたコミュニケーションの現代的展開 ワークショップからアールブリュットまで</p>
<ul style="list-style-type: none"> ■ 現代美術 ■ ワークショップ ■ アールブリュット ■ アウトサイダーアート ■ 考現学 ■ 落書き ■ 超芸術トマンソ 	<p>課題解決に役立つシーズの説明</p>
	<p>一途とは言い難い雑多な経験から私なりに“アート”を、そしてアートと教育をつなぐ“美術教育”を模索する中で、私が直感的に興味を覚え取り組んできたのは、下記の3つです。本学でより長く学生をしていた私を感じた、「教員養成を旨とする教育学部の美術でなぜ芸大のミニチュアのような授業なのか？」という違和感から生まれた、教育学部でこそ必要且つ重要だと思ったテーマでした。</p>
<p>藤田 マサヒロ Masahiro Fujita</p>	<p>I : 身体を表層をモチーフにした造形表現 II : アールブリュット(アウトサイダーアート) III : アートを通じたワークショップ</p>
<p>教育学部 教授</p>	<p>I の造形表現は一個人、一作り手としての表現活動で、塑像の製法に起因する本体(身体)と型(時空間)の関係が生み出す“皮膚感覚”のようなものが気になって、発表未発表によらず学生時代からずっとやっていることです。個展では Hollow Face 錯視を伴う凹凸両面の超リアルなマスクやキュービー人形の型をインスタレーション展示したり、スタッキング(積重ね)に注目しロダン作「考える人」を題材に、形態の表層が見せる表と裏、物体に潜む隠れた形の視覚化を試みています。そこに出現する形は、実は私たちが見えていないけれども感じているカタチなのだと考えています。昨年来は、イラストレーターSEOとのコラボで、緑の好きなグリーンちゃんと顔のないミドリグマを立体化、『Green chan Project』として展開しています。</p>
<p>【専門分野】 ・現代具象彫刻 ・アウトサイダー・アート ・ワークショップ</p>	<p>II のアールブリュットへの関わりも、学生時代から続いています。設立から関わってきたボーダレスアートミュージアムNO-MA(近江八幡市)や“美の滋賀”を唱う滋賀県のご数年の活動、さらに言えば時代の大きなうねりの中で、アールブリュット(アウトサイダーアート)も市民権を得つつあり、この分野でも次のステップに入る時期が来ていることを感じます。今後は、アールブリュットの生まれる現場に足を運び、広く美術教育との接点を模索していきます。</p>
<p>【プロフィール】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 第20回日展(’88) 『禁治産者』 ● 京都美術工芸展(’98) 『裸の王様シリーズ 脱衣』 ● アーバナート#7(’98) 『マンホールシリーズ 都市の皮膚』 ● 天理ビエンナーレ(’99) 『house』 ● ボーダレスアートミュージアムNO-MA設立運営(’02~) ● 越後妻有トリエンナーレ『お祝い隊』(’03) ● 滋賀医科大学小児病棟壁面『瀬田の森』(’09) ● 芸術版楽市楽座アートin長浜『HappyMake』(’09) 『エガオ絵や』(’10~’14) ● 滋賀大学産業共同研究センター報#9『アートの力』(’10) ● 宮崎豊治氏滋賀大退官記念企画『裏庭茶会』(’11) ● 個展等「表層はカタチを纏っている」(’12)「ひそむカタチ考える人考」(’13)「Green chan Project 緑をさがして」(’14) ● BIWAKO ビエンナーレ 2014 「Sracking His Backs」 ● 日韓現代芸術交流展『不思議の国のグリーンちゃん』(’16) ● 守山市民ホール現代への視点『ある日、森の中クマさんに会った。』(’16) 	<p>III のワークショップの実践は、アートを介して人と人が繋がる、いわば学校を抜け出した美術教育の実践です。大学の授業で始めた「大学生の造形遊び」が、自分の楽しみ、自分の発見を経て、他者の喜びや発見に形を変えて広がってきました。例えば似顔絵のワークショップ - お客様にもこちらを描いてもらう似顔絵の描き合いは、数年前にゼミ生らの発案から生まれました。</p>
<p>一見、つながりなく見えるこの3つのキーワードですが、本学赴任以来、“彫刻”の入門として授業で、あるいは学外での講習で取組んでいる『目隠し彫刻』(目隠して視覚を遮り、他の感覚を駆使して感じて粘土で造形するというもの)には、これらの3つの要素がどこかで深く繋がっていることを今更ながら感じます。私にとって“アート”というフィールドは、学生や受講者に留まらず多くの人々の中で、コミュニケーションが連鎖的に発生していく場だと考えます。人々を意識的に巻き込んで、アートによるコミュニケーションの可能性やその意味を、教育の側面からも検証し続けたいと思います。</p>	<p>一見、つながりなく見えるこの3つのキーワードですが、本学赴任以来、“彫刻”の入門として授業で、あるいは学外での講習で取組んでいる『目隠し彫刻』(目隠して視覚を遮り、他の感覚を駆使して感じて粘土で造形するというもの)には、これらの3つの要素がどこかで深く繋がっていることを今更ながら感じます。私にとって“アート”というフィールドは、学生や受講者に留まらず多くの人々の中で、コミュニケーションが連鎖的に発生していく場だと考えます。人々を意識的に巻き込んで、アートによるコミュニケーションの可能性やその意味を、教育の側面からも検証し続けたいと思います。</p>
	<p>写真: 左より BIWAKO ビエンナーレ展示風景 / Green chan Project in 附属小学校 / 「目隠し彫刻」授業風景</p>